

昭和二十四年七月二十三日
 昭和二十四年五月十五日
 第三種郵便物認可
 第三行（毎月一回・十五日発行）

（通第三五九号）

慈光

第三十一卷 第五号

次

罪と恵み	近角常観	(1)
二世の利益	白井成允	(4)
一道会の記	榊原徳草	(8)
自照日誌抄 (10)	西元宗助	(13)
念仏詩抄	木村無相	(16)
同座の聖人	花田正夫	(18)
撮取不捨	石田十九三	(22)

罪 と 恵 み

近 角 常 観

我等は罪は深くして、これを消滅する望み絶えはてたり、これを滅するはおろか、その兔の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりも、これを避けることあたわざるなり。

如来の大悲大願を起したまうゆえんは、実にこれにあり。もし我等にして善を修し、悪を廃し得べくんばことに超世の大願を建てたまうことあらんや。そもそも超世の悲願を起したまいしゆえんは、実に苦惱の我等、一善一行だに為しあたわざるの点にあり。

故に如来の御恵みは、その罪に對する恵みなり。その罪を滅し能わざるをあわれみたまうなり、その業報をまぬかるるあたわざるを悲しみたまうなり。故に本願の真意は、その罪を滅し得ざるものをことに救い、その業報をまぬかるるあたわざるものをひたすらたすけんとの御心なり。超世の悲願と名づけられるところは実にこれにあり。

この如き本願を聞きながら、なお我が悪を悲しみ、我が善を励まんと試むるは、修養としては感すべきことなれ

ば、実際に浮き上り得ざるも、常に浮き上らん浮き上らんとの下心絶えざるなり。

そもそも自己の力にて浮き上り得るものなれば、ことに超世の本願を起したまわんや。超世の本願を起したまうゆえんは、その浮き上り得ざる我等を引き上げんがためならずや。

我等、はじめてこの悲願に遇いたてまつりて、その本願の力にまかしたてまつりたるとき、今までの浮き上らんとする思いは全く絶えて「とてもわが力にて浮き上り得らるるものに非ず。今まで木板の如く思いたる我身は、全く頭石の水中に沈めるがごとく、百千万劫をふるとも一分一厘も浮き上るべき資格なき罪惡の塊」たることを自覚するを得たり。この如く全然浮き心の絶えはてて、如来の御前に頭石の如くわが身を投げ出し得るところ、これ真の罪惡觀なり。これ自ら投げ出したるにあらず、如来すでにしらしめして「煩惱具足の汝」と呼びたまうみ声の下に、思わず知らず罪の子として一点のはからいなく慈懷の中に攝取せしめられし姿なり。

「浮き上り得ざる頭石のごとき我身なり」と自覚し得るは、頭石の如き汝を引き上げんとのお恵みの手の達すればなり。我等はこの御恵みの深き思し召しをいただくことを忘るべからず。単に我等をあわれむことにはあらず、ただ

ど、その実自己の身の上を知らざるものなり。もし極言せば、わが悪を悲しむは、われ悪を去り得べしとの下心あるがためなり。善を励まんと試むるは、われ善を為し得べし、とかしこき思いのひそめる故にあらずや。かくてわが悪を悲しむは、世界的な眼光にはすこぶる恭謙なるが如きも、如来に對しては全く頭を下げざるなり。わが善を励まんとするは殊勝の態度なるが如きも、本願に對してはかえりて驕慢なる態度をとれるなり。実にこれを心を潜めて深く本願の真意を味うべきところなり。

そもそも我等が自己の罪惡に對する態度は、あだかも浮きあがらんとする木板を力をもって水底に沈めんとするがごとし。如何にも自己の罪深きを観じて懺悔するその下より、必ずいずれの一端か、たちまち「されど我とて全くの罪惡にあらず」など種々の口実、云いわけをもって浮きあがらんとするなり。しかも多少なりともはたして浮き上り得るかというに、その実少しも善くなり得ざるなり。され

に我等を愛しむというにあらず。もし慈悲とし云えば仏として慈悲ならぬはなく、光明とし云えば仏として光明ならぬはなし。今特に、大悲大願といい、諸仏中の王、光明中の極尊と称せらるるゆえんのは、超世の悲願、無碍の光耀ましませばなり。超世の超世たるゆえんは、他のすべての道をもつてたすかり得ざるものをたすけんと思ひたまえるところ、超世の願なり。他の光明の照らし得ざる有碍のわれらを照らして障碍するところなし、これ無碍の光なり。かく如来の恵みは、滅し得ざる罪ある我等を救わんとする恵みなり。我等の罪は如来の恵みならでとはとても一分一厘も浮かぶあたわざる苦海沈淪の重荷なり。この重荷あるがために、如来超世の願を建てたまい、この本願あるがために、我等はこの重荷をまかせたてまつりて、その苦患をまぬがらせたまうなり。恵みは罪に對する恵みなり、罪は恵みと相関することかくのごとし。

然るに世の信仰を求むる者、罪あるを悲しみて、その罪の滅すべからざるを知らず、恵みあるを仰げども、罪あるを救う恵みなるを知らず、罪は罪にしてその罪に對する恵みあるを知らず。恵みは恵みにして、その恵みは罪を恵むことを知らず、故に罪と恵みと別々にして、遂に出違ひとなり、徒らに罪を悲しみ、氣やすめに恵みを仰ぐのみにし

て、一喜一憂、若存若亡の状態におちいるにいたる。故に吾人は罪深きにつけても、その罪業深重の我等を捨てたまわざる恵みを仰ぐべきなり。如来深重の御恵みを仰ぐにつけても、かくまでも如来の御心を傷ましめたまつりし罪惡を懺悔し奉るべきなり。

罪障功德の体となる 氷と水のごとくにて
氷多きに水多し 障りおおきに徳おおし

この御和讃に、煩惱を断ぜずして涅槃の妙果に到らしめたまうなり。

すでにこの如き本願円頓一乘します。逆惡を摂受したまう御力を信じたてまつる一念、煩惱を断ぜずして、涅槃を得るなり。

歎異抄に曰く「およそ惡業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほころおもいもなくよかるべきに、煩惱を断じなば、すなわち仏なり。仏のためには五劫思惟の願その詮なくやましますさん」と。

ああ我等は、五劫思惟の願に安んじて、煩惱を断ぜずして涅槃を得べきなり。されど如来をして五劫思惟のお心をいたましめたまつりしゆえんは、そもそ我等が煩惱具足して、これを断じ得ざるためならずや。故に五劫思惟の願に安んじて煩惱を断ぜず涅槃を得ると共に、これとても断じつくされぬ煩惱深重なるがために、五劫思惟の御苦勞

をおかけせしことを懺悔したてまつるべきなり。

故にまた歎異抄に曰く「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」と。

嗚呼われらは永久に下におちゆく底下の凡愚なり。本願はそれを救わんとこの如来の御心なり。われらは下に落ちゆく頑石なり。如来はこれを引き揚げたまう御力なり。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず
仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず

嗚呼、われら、罪惡深重、煩惱熾盛のもの、超世無上の悲願にあいたてまつりてこそ、無始以来の苦患をまぬかれもろもろの聖尊の重愛に浴したてまつる。南無阿弥陀仏。

近角先生述

歎異抄は、教行信証の天体を観測する望遠鏡であり、また拡大鏡であり、顕微鏡である。

十一条以下は御消息において、その異義の萌芽を見ることのできる。参照すべし。

二世の利益(一)

「御たすけありたることの有難さよ」と念仏もうすべく候や、又「御たすけあろうずることの有難さよ」と念仏もうすべく候や、と申上げ候とき、仰せに、いずれもよし、ただし、正定聚のかたは「御たすけありたる」と喜ぶところ、滅度のさとりのかたは「御たすけあろうずることの有難さよ」と申すところなり。いずれも仏になることを喜ぶところよし、と仰せ候なり(聞書十九条)

念仏は有難さよと念仏もうすのである。喜ぶところである、満たされた者の声であります。念仏はいのりではない、つとめでもない、それは仏徳自然の現れであります。

思うに、人ひとたび己れ自らを考えて、ここに意味なき日を送るに堪えず、遂に仏と成るの志を發すとき、先ず道徳的努力、与えられる義務の念々に充実を願うのであります。然し煩惱に障えられて実行が出来ぬことが知らされます。これは痛ましいが、如何とも為し難いことであります。

しょう。ここに死か、或は祈りに入ります。その祈りの最も高い「願わくば予に仏の徳を行せしめたまえ」となり、それが凝り固まったものが、即ち念仏であると云われましよう。己れの上に仏の徳の現われんことを仏に向って祈るところの祈り、即ち念仏は、この故に道徳的態度の必然の過程であります。

然しかかる祈りの念仏もまたつまづきます。一つには煩惱熾盛で、純粹な祈りが出来ず、また仏智を信ずることが深くないためで、これ「自力の念仏」であるためであります。聞書の第一条に、曰く、

「自力の念仏というは念仏多く申して仏にまいらせ、この申したる功德にて仏のたすけたまわんずるように思うて称うるなり」

これは、未だ己が本性の浅間しさ限り無きを見ない者の為す所であり、仏智のはるかに広く深いことを信じない者のすることであります。

ここにこれを超えねばなりません。それには一面に於て自力のはかないことに気づくのである。自分はいくら骨を折ってもとても煩惱罪惡の凡夫、心の奥からこんこんと湧き出る濁水の尽きることのない愚者と知ることです。この様に知るには己れの力に由るのでありません。愚者が己れを愚者と知ることが出来ません。それを知るのには知らされるのであります。己れに非ざる他者の力、己れがそれに向って折りつつある方の力、即ち仏力によって知らされるのであります。だから超えるとは、他面に於て仏力の大きなに気づくことでもあります。これに気づかない限り超えることは出来ません。自力のはかなきに気づくのは、同時に仏力の大きなに気づくのであり、仏力の大きなに気づくのは同時に自力のはかなきに気づくのであります。

はかなき煩惱罪濁の者を照したまうて、悲しみ憐れみ慈しみたまひ、必ず救わんとの誓願を成就して下された御徳の果を賜るのであります。その御徳果、即ち南無阿彌陀仏をいただき、その慈悲を味いて、始めて、この御慈悲のお念仏より他に己れの住家のないことに徹して、自力の祈りの念仏は超えられるのです。私の請い祈らない以前に、私は私共の虚仮不実をみそなわし、かえって私を「救わん」と呼び続けていられたのである。私が煩惱罪濁の身でおこがましくも祈るなどという驕慢をあえてしていたのか悲

愍されて、仏の方でかえって私を「救わん」と呼んでいて下さったのである。私のために救いの御徳力を成就せられて南無阿彌陀仏を恵み与えたまうたのであります。私南無阿彌陀仏は仏の御名であり、御徳力であります。私をして必ず仏の徳を成就し得しめて下さる御徳力であります。私が自分自身を知らず、仏を知らず、迷うている間にこれを賜りて、私自身を知らしめ、仏を知らしめ、私を成仏せしめたまうのであります。これは仏の御恵みであり、御誓願の成就であります。だから祈らず励まず、自ら強いて念仏せず、虚仮不実のままにして、即ち仏の御徳の働きの自然として、おのずから仏と成らせて頂く。私はこの南無阿彌陀仏一つに生かされるばかり、これを他力の念仏と申します。聞書第一条に、曰く、

「他力というのは弥陀をたのむ一念のおこるときやがて御たすけにあずかるなり。そののち念仏ももうすは御たすけありたるありがたさ／＼と思うところを喜びて南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏と申すばかりなり」

他力の念仏、仏様のお慈悲がいただけたところに申すお念仏は、即ち「ありがたさよ」とよるこび申す念仏であります。

○ お念仏の有難さの中に二つの利益がこもっています。い

わゆる現当二世の利益であります。御たすけありたることを喜ぶ、即ち入正定聚の身となれるを喜ぶ利益と、御たすけあろうずるとよるこび、即ち必ず滅度に至るべきを喜ぶ利益とである。この二つはよくよく分別せねばならぬこととあります。

第一に念仏は「御たすけありたることの有難さよ」と喜び申す念仏であります。たとい善心を発し励めども、その善心忽ち濁りて遂に真実無き煩惱の迷い児が、今や久遠劫来招換して下さる真実清浄の慈親の懐ろに抱かれたのであります。かかる浅間しき者をよくもお抱き下されたことよこのうえは、たとい貪愛瞋憎の煩惱しばしば狂うとも、否狂えば狂うほど、いよいよ深く私はこの慈父慈母の慈懐の中にあり、撰取の心光のうちに照護されているのです。もとより久遠劫来の罪業に縛りつなされた私であつてみれば、縁にふれて起す煩惱はしげく、慈父慈母の御涙を忘れ、御心に叛いているのが常で、念仏もものうく、心が散乱するのをどうすることも出来ぬのであります。しかもかかる私である故にこそ、み仏の御涙は久遠劫来、この私に向つてそそがれているのであります。「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた」のであります。浅間しければ浅間しい程いよいよ強く撰取せられてあるのです。これは普通の思想、常識の評価とはちがっています。しかも

病む児を抱く慈母のおもいはいつもこれであります。だから「善人なおもて往生を遂ぐ、いかにいわんや悪人をや」とも云つておられる。私が善いから助かるのではない。悪いからお助け下さるのである。だから煩惱罪濁の者にして即ち助かるに間違いないのです。仏慈深きが故であります。仏智明けきが故であります。「御助けありたることの有難さよ」と念仏申すのは、この仏智に照らされ仏慈にはぐくまれる者の自然であります。

かかる者を正定聚といわれます。正しく定まれるともがらとは、すでに親のふところに抱き納められてしまつているので、たとえどんな事をしてかそうとも、そのふところから落ちる心配のない者、必ず親の境涯に到らしめて下さる落着きを得た者を用います。自分の善惡をおいてただ親様のお慈悲に安らぎ得た者、自分が病もうが狂おうが、親様がついて居て下さるからもう大丈夫となつた者のこととあります。

然し大丈夫とは、此度はたしかに成仏出来るに間違いないという安心のこととあります。即ち不退転の徳をそなえしめられたのです。不退転、即ちいかなる事があつても墮落することなく、必ず仏道を成就すということは容易なことではありません。菩薩の行を修して初地の位に到達したとき得られる所とあります。その菩薩に五十一の位があつ

白井成允

て、それらを体認し尽して始めて成仏出来るのですが、地位とは、それらの最高の十位を指すので、それから以下の位の者はどんなに賢善精進しても魔障にあうと転倒し退転してしまいます。それが永い苦勞を経てこの地位に到達すれば、転倒の心配がなくなり必ず成仏出来るから、即ち歡喜が多いのでこの地位を初歡喜地と呼ばれます。「たとい睡眠し、懶惰なりとも二十九有(迷いの境界)に至らず」必ず成仏出来るのであります。然るに念仏の信者は、自分の努力によるのではないが、仏の御恵みの故に、何時死なうが、必ず成仏する者と定められてあり、仏力に支持されて、再び迷境に墮することの出来ぬようになっていきますから、正定聚の位は、即ち初歡喜地の菩薩の位に等しいのであります。否、単にそればかりではない、菩薩の最高の位に到達された補処の位に居られる弥勒菩薩についてさえも五十六億七千万 弥勒菩薩は歳を経ん

まことの信心うるひとはこのたび覺りをひらくべし

といわれますように、仏力に恵まれて安んずる正定聚の人は、弥勒菩薩よりもはるかに速く、仏の覺を開き得るのであります。煩惱罪濁の凡夫が、唯親様のやるせなきお慈悲のお念仏一つで、忽ちこの如き妙なる位に入らしめられる、「御たすけありたることの有難さよと念仏もうす」のは、このことわりを聞きわけえたる者の自然であります。

群鳥

狹庭^{さには}べに黄葉^{もみ}づる萩の下蔭に小鳥ら遊ぶなもあみだぶつ

鳥の声きこえそめをり起き出でてわれもこの日のつとめに入らん

群鳥の轉る聞けば天地にみのりの声はみちみてるかも

わが煩惱

おほけなくなむあみだぶつとききまつるわが煩惱のあやにいとしき

みほとけのおんいつくしみたまのをの深みにうけて歩ませ雄雄しく

一道会の記

榊原徳草

次に川畑愛義先生のお話の概要は次のようでした。十月、秋になりますと木犀(もくせい)が香り出し、そしてさわやかな気候となります。十月の終りになると毎年浄住寺で御縁が催うされ有難いことと思えます。何かと毎日あくせく走り廻っていますか、何とかこの会にはお参りして皆様にお目にかかりたいなあと、願いと申しますか、そういう思いがあるわけでありませぬ。

先程、徳草さんに会いますと、あんた来てくれんのかと心配していたと言われます。ああ矢張り待っていてくれたと嬉しく思いました。いつもだと、又何か言わされるかも知れんと後の方で控えて居るんですが、今度のがれられないように「何か話してくれ」と一筆頂いているのです。それで覺悟して原稿を書いたので、悠々として今日は参りました。

池山先生に教えを受けて何年になるか、一道会が出来てから十何年になります。先生がお亡くなりになってから皆

様が先生の信徳を慕ってお集り頂けることは、本当に奇蹟のように思えます。いかに先生は偉大であったかということを感じます。これから読みます原稿は、この会のために書いたのではなく、他所で話す原稿を控えているので、これは八日の夜七時半から短波放送するための概略です。

ドイツの詩人ゲーテは「この世の中で一番幸せなのは健康であるという事ではなくて、健康に成ることだ」と言っています。現在健康なのは大した事でなく、病氣した後、これから健康になることが最高の幸せを感ずることだと思えます。これは病氣になって初めて健康であることの有難さを知ることにあるようです。今日もお医者さんの城さんがお出でなのですが、医学と宗教の事を話します。一寸はじめの内は医者臭いかも知れませんが、それにしても人々の病氣を治し、或は予防医学、治療医学の進歩は誠

にめざましいものがあります。例えば脳卒中になった時、今迄の医学では安静に寝かせ、その回復を待つしかなかったのですが、最近では頭蓋骨を通してレントゲン検査をして、それからデーターをコンピュータにかけて、どの血管が破れて、どの位出血しているか。或は脳のどの部分に血栓ができているかをハッキリ写し出すことができ、もし必要なら直ぐ頭蓋骨を開いて、破れた血管を縫い合せ、塞いだ血管をとり出すなど、とても信じられないような早さで脳卒中を治すことが出来るようになりました。

又心臓を養う血管は冠状動脈があり、これにコレステロールなどがへばりついて、固くもろくなると、血管の幅がせまくなり細くなり、血液が流れ難くなります。そうなれば狭心症や心筋梗塞が起り易くなるわけです。そんな時には脚の静脈を切り取って大動脈と継ぎ合せて冠状動脈との間にバイパスを作って、血液の流れを良くすることもおこなわれています。

更に日常的なことでは、一端へばりついた食物のかす—食物が完全燃焼しないで残るわけです—余分のコレステロールなどを食事療法や適度の運動療法などによって、ゆっくりにがしてゆくこともできるようになりました。これらは今迄出来なかつた動脈硬化の若返り法です。

それから又最近の話題として試験管ベビー。これは女性

ぬ病気もありますが、大部分は自分の生活や気分を持ちょうで健康になったり、病気になったりするわけです。たとえばガン、これはどうにもならぬと考えています。日本人に最も多い胃ガンは、辛いもの、熱いもの、多く食べることに深い関係があることが愛知県のカンセンターで判りました。又高血圧症でも身心の過労や、心の不安、ストレス、酒煙草の飲み過ぎが大きな原因となっています。又最近の心身症は勿論、すべての病気の約四割は心の持ちょうに深い関係があると云われています。「病は氣から起きる」と言われる通りです。

さて、京都大学の北村教授は、学生の心身症やノイローゼは、学生の猛勉強によるのではなく、むしろ学生のふしだらが原因だと云っています。例えば普通の健康な学生達は大部分夜の十二時までに寝ているのに、これらの症状を訴えるグループは、僅か五パーセントが十二時までで、九十パーセントは、それ以後まで勉強だと云います。人の身体の中には身体時間(ポドタイム)というものが出て来ています。これは人類誕生二百万年以上の自然適応によって成立したもので、風は活動し夜は眠るようになっていくのです。即ち血液やリンパの動きから神経系、ホルモン系にいたるまで、風動く動物、風行動性動物として仕組みられているわけです。換言すれば、太陽と共に起き、夜は寝る

の卵管が塞つたりして卵子と精子が会えないときに、両方の卵子と精子とを取り出して試験管の中で受精させ、これも一度子宮内に送り込んでやる方法です。これで子宮に絶望していた夫婦にも子供が恵まれる可能性が出来てきたわけです。

それではこれ程医学が進んできたのだから、病気や症状が減少したかと云うと、決してそうではない。確かに我が国の平均寿命は男七十四、女七十九となってきました。然しその中には必ずしも樂觀出来ないものがあります。先年行われた労働省の調査では、元気で働いているはずの勤労者サラリーマンの五十四パーセントは大変疲れやすい、健康に不安があると訴えており、現に十四人に一人は医者通いをしていくことが判りました。

このように医学は日進月歩し医療費は飛躍的にのぼり、昭和五十一年には七百七十億円にも達し、先年度に比べて十九パーセント増です。しかもこの間、国民総生産GNPは十二パーセントしか伸びていないのですから、国民医療費はその倍近くなります。

この様に医学は進み、医療費は増しているのに何故病気は減らず、国民はむしろ半分病人化してゆくのでしょうか理由は簡単です、病気は医者が治したり、予防するよりもむしろあなた自身なんです。中には自分にはどうにもなら

というように人体にはバイオリズムが出来ているわけです。この様な肉体的な問題の外に、もっと大切なのは精神の問題で、これが今日の問題と関係あることですね。

中国の詩人白樂天の詩にあるように、人生行路の六ヶしさは、高い山の峻しいことでもなく、又広い海の嵐でもない。一番大事なのは、人間関係のもつれであると云っております。特に此頃のように広い自然が失なわれ、狭い空間の中では、対人関係が益々窮屈になり、切実な問題が起りつつあります。すでに幼い時から学業試験の競争や、入学試験の前に、ともすれば友達同志でライバルになりがちです。大人の場合でも競争のはげしい職場や社会の中で生命がおびやかされようとしています。又当然互に睦み合い、思いやってゆかねばならぬ自分の家庭の中においてさえ、争いが出てくることもあります。

こうしたことから、三千年の昔、大聖釈尊は、この世を苦界とか、火宅と云われました。しかし考えて見れば、苦界、火宅と警告する人は、そうでない安養の世界、彼岸の浄土を持つ人であるに違いありません。そこで私達も、そのような波風のたたない暮しをしたいと願うようになるのです。この宗教の世界も矢張り命がけでなければならぬといわれています。それはわが生命を賭(か)けて道を求めるという事です。そしてそれは現在わが死を見つめる

ことと云えそうです。佐賀藩士の「葉隠れ武士道」には「毎朝毎夕、改めて死に死に、死身になりて居る時は、武道に自由を得る」とあります。本当に死ぬときめてかかれれば相当のこともできるし、又苦痛にもならないわけですから、すべては空（くう）に還えるからです。実際、毎朝毎夕死と対面する時は、生命の自由を得る、少々の障害や困難を乗り越えることができるに違いありません。

近頃は安楽死を願う人が増えてきましたが、私はむしろ安楽死よりも、本当の安楽生の方が先決だと思っております。悠久の死の前にこの短い生命の姿を写し出し、うろたえず、あわてない生活をするこそ人生の最上の生き方であるに違いありません。

「死の瞬間」という書物を書いたアメリカのキプラー・ロス教授は「臨終の時になって多くの人が、言いたい事が一杯あるようです。後に残る人々はいまわの切実な声を十分に聞いてやり、又愛の言葉を投げかけてやるべきだ」と言っています。明るく豊かに生き抜いてこそ、はじめて静かな満足死、即ち安楽死が得られるのではないのでしょうか。しかも瞬間に、ああもしたかった、こうもしたかったと考える直してみても、もう追いつきません。そこでこの現在の姿を、只今の死の鏡に写して、死んだつもりで内観し、安静すれば、人々は返って其日其日を呑気に気楽に落着いてゆ

立たんということです。小賢しい知恵をもって論ずべきではない。歎異抄から頂くと「すべて往生には賢きおもしろい具せずして、ただほれほれと弥陀の御恩の深重なること、常におもい出しまいらすべし。しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然とは申すなり、これすなわち他力にまします」と。認めると言っても、認めないと言っても、それは言い過ぎである。本当に死ぬ人の身になってみれば、自然の教えが出てくるのではないか。そういうことが安楽死に対する私の考えであります。ありがとうございます。

（次に、宮地廓野先生が今日やむを得ず欠席されるので、その依頼された伝言を川畑先生が述べられました）

私の親友の宮地兄が私に伝言されたことは、この有難いお念仏を、海外にもひろめたい、それに苦心されて浄財を募集されています。財団を作りたいとの御意向で、国際真宗文化協会というのを作っておられ、その趣旨や要領を書いたものが玄関の机に置いてありますので、お帰りの時に一部宛お持ち帰りいただきたいのです。これに西本願寺の前法主も一千万円寄贈されました。其他多教の浄財がよせられてあります。どうぞよろしくご賛同をお願いします。

けるのではないのでしょうか。

欲を云えばきりがありませんが、何とか衣食住は足りている今日、より大きな悩みや苦しみは、どうやら人間関係のもつれ、怨み、つらみ、などであるようです。ここでまづ外へ向っていた視線をわが内にひるがえして、先ず自分自身を見ることでしよう。親鸞聖人は、小さな慈悲も、ささやかな同情心もない自分の本性に泣いて、仏の大きな慈悲の前にひれ伏されました。他人の非や、罪をあげつらうことは容易なことですが、わが身のエゴを知ることが、本当にむづかしいようです。少くとも私達は人さまに親切や同情を押し売りすることなく、せめて悪口を言ったり、干渉したりすることは止めにしたいたいです。或る賢い人はこのあたりのことを、次のように言っています。「仏様はいつもほっとけと云ってござる。泣いても笑っても仏様が見てござる」ここに三界は唯わが一心にあり、という古い言葉を思い起こされます。眼を閉じて我が生きざまを死の中に見出し、又あるべきわが死にざまを、光ある命の中に見出したいものです。このように宗教が単なる生、或は死のみの問題だけでなく、生死を一体として根本的に解決してゆくことが有難いことと思えます。

一言だけ追加しますと、私は安楽死の問題で、それを認めるか否かの問題があるのですが、これは、原則論は成り

『壁は見えず』

川畑 愛義

愛欲菩薩

愛憎の渦潮満ちてきはもなき洋の暗きに人ら溺るる

三界火宅

吐く息は瞋恚の炎積迦牟尼は救いがてなる衆生憂ひけん

内観実相

もろもろの顔うごめきてあえぎる内なる吾を写せる鏡

万象流転

廻る廻る三世が廻る廻りつつまはらぬ心は南無阿弥陀仏

わが墓標に記せる歌

行き当りつきあたりせし業縁の壁は見えずも光寂けき

自照日誌抄 (10)

— 店じまいの準備 —

西元宗助

念仏たまりて、底知れぬ深い我執の迷妄を照らされ、いまさらに驚く。

自分が自分が、という、この我執の深淵。この我執の迷妄の底知れぬ深さに、毎日毎日、あきれはてながら、この迷執を照らしたまう大悲のみ光に帰依し、合掌したてまつる。

ある調査のため、久振りに東都に滞在し、郊外の神社を訪ねてまわる。そして昔、郷社であったほどの小社の多くが戦後、荒れはてて、神殿の内を覗くと紙くずだらけであったりして、胸がいたむ。

お宮が荒れ、お寺にもお詣りがすくなかったなら、日本の子供たちは、いよいよ、どうなっていくかと、昨今の世相を思いあわせて、考えさせられる。

その翌日、小雨の中を、浅草の裏なる山谷(さんや)の

入院中の木村無相翁が、昨秋の一道会の折、翁の若かりし日、大阪の友の家に泊めていただいた冬の夜中、つい二階から失敬放尿なされたことを「すまなんだナ」と、その宿主である友の八木さんに、何十年振りに、なつかしそうにわびて居られた、その童顔を思い浮かべたことです。

その無相さんから、南無々と信心歓喜のお便りがとどく。ご病床も、これ娑婆の浄土かとおおがれることであつた。

さる友人に、ある不祥のことがあって、昨年来、関係者はすくなからず心を痛めた。尤もわたしは冷淡であったのかも知れぬ。幸いその一件、関係者の配慮により漸くして落着いたので、この件を深く案じてこられたS博士だけにはと、そつと内報したところ、折返し左の玉葉をいただく。

拜復、尊翰かたじけなく拜誦。一件、一応落着、何よりと存じますが、この上とも当人はもとより、不肖もよく罪悪深重の身を反省し、その日その日を、つつしみたく存じます。

わたしの周辺の教育学、哲学の先輩の中でも、S先生ほ

ドヤ街を、あちこち歩き、仕事にあふれた人々が、簡易宿で騒いでいるのを見ききする。ここでも亦、いろんなことを考えさせられ、しまいには頭がいたくなつた。

榎本栄一さんから、中日新聞にお載せになった詩を送ってください。そのなかに、

朝くらく

物音ひとつせぬここで

小便さらさら

天地さまの

いのち流れるなか

という詩がありました。放尿を、こんなに美しく、天地さまのいのちと歌った詩はないと、感じ入りながら、只今

どに謹直な第一級の学者はないといわれている。それだけに近來、この御玉葉ほどに心うたれ、感銘し慚愧せしめられたことはない。あまり物に動じない家人も深く感動して、さすがはS先生と讃歎したが、わたし、これは仏さまのおん葉書と、ひそかに稽首し、書棚の特別の抽出しにしまいこんだことであります。

わたしも人生の店じまいのこと、もうそろそろ考えなければならぬ年ごろになつた。

ある日のこと、家人もいう。父さん、いざという日がきても困らぬよう、ちゃんとしておいてくださいよ。例えば、子どもたちからも云われたんですが、アルバムにはつてある写真の中に、私たちの知らぬ先生がたが沢山いられる。アレ、ちょっと説明がきをしておいてくださると有難いのですがというので、ウンと生返事をしながら、思つた。人生の晩年は閑(ひま)になると予想していたのに、いよいよ店じまいの準備をはじめるとなると、かえって案外、忙しくなるものもあると。

じっさい、わたしの場合、店じまいのため、あれこれ考えると、すくなくとも、後十年、元気に仕事をしなければ、とうてい店じまいも出来ぬことを思い知らされ、そのうち、ハ、ハ、と思わず爆笑してしまったことである。と

いうのは、以上の店じまいのもくろみは、すくなくとも、この私だけは、当分のちが大丈夫と、勝手に決めこんでの話でありますから。

それにそんなことを一応、殊勝気に思いながら、片方では、いや実際は、老後の生活安定のためという大義名文のもと、最近いよいよさもしくなり、なにかにつけてお金の胸算段をしているのですから、われながらあさましい。

尤も、このような私であればこそ、ナンマンダブツでございませぬ、罪障オモシトナゲカザレ。はい、わが悪業煩惱のつきるときまで、わが煩惱の薪を、大信心の焰の中に、ドンドン投げこんで、燃やし燃やしていただいて、当来の大涅槃の夕を待ち設けたいものであります。すこし、立派そうに申しあげすぎたかも知れませんが、ごめんください

不問語

清水凡禿

○。私の子供の頃、近所に一人の婆さんがおった。雨の日でも雪の日でも、毎晩私の家に来て、毎夜家人と語りあつた

念仏詩抄

それをこの我れ

和上おおせに

〃ああ我等このたび

さいわいにも

万劫にも受けがたき

根具の人身を受け

億劫にもあいがたき

無上の妙法に

あいたてまつり……〃

それをこの我れ

どう受けていることぞ

どう受けていることぞ

ナムアマミダブツ

和上〓禿顯誠師

その婆さんがよくこんなことを云った。「私の死ぬときはコロリと死んで、誰にも迷惑をかけぬ」と。それに対して祖母は常に云いました。「死の縁無量だ。どんな死に様をするか知れたもんではない」と。結果は皮肉でした。

その婆さんは妙な病氣になって、永わすらいをして家人から冷遇をうけて死んだ。祖母は唯一日だけ病んで、七十九才の老令のため、尿毒症をおこしたが、すぐ熱はさがり快方に向つたと思つたのも束の間「今度こそいよいよお浄土まいり、一足おさきに御免」と云って亡くなった。

○。後で祖母の行李をしらべたら、万一の用意にと作つておいた沢山のオシメが出た。これには唯頭がさがった。

去る日ヒヨイと便所に飛込んだところが、蜘蛛が巣をかけていて、私の顔にひっかかった。両手で目をつぶりながら顔をなでて漸くとり払った。そして目を開いたら、巢の主人公の蜘蛛殿は一生懸命糸をたぐつて柱の上の方に逃げていた。それを見た時、無性におかしくなった。

それは蜘蛛が折角、網をかけて餌物を待っていたのに人間様がひっかかった。あわてて逃げる姿を見て、自分が省みられた。自分の計画したことは立派な理想の世界であるが、あにはからんや、とんでもない物が現われて来て、あわてふためく私の姿が目の前に見せられたような気がした

木村無相

ナムアマミダブツ

お慈悲

和上おおせに

〃叱(しか)られて

みたやお慈悲の

袖(そで) しぐれ——〃

しかられて

しかられて

しかられてこそ

育(そだ) つというもの

おしかりが

お慈悲——

おしかりが

お慈悲――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来さまのお聞かせを

和上おおせに

〃如来さまのお聞かせを
ほかにして

己（オレノ）が聞かせて
いるほど
おそろしいことはない〃

説くものは

如来さまの

お聞かせを――

聞くものも

如来さまの

お聞かせを――

ナムアミダブツ

同座の聖人

歎異抄第九章に、唯円大徳が親鸞聖人に

「念仏申し候えども、踊躍歎喜のころおろそかに候こと、またいそぎ浄土へまゐりたきころのそうらわぬはいかにと候べきことにて候やらん」とおたずねもしたとき

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊おなじころにてありけり云々」

と、お答え下さっている。このことは一読して何人の心をも強くうつものである。世間に色々なよい教えがあるが、ほとんどが教えて下さる人はいつも高所に居られて、右だ、左だと指さして下さるものばかりである。それについて行けない者は脱落してしまわねばならぬ。しかし絶対真実の世界は、相對虚仮の我々では、手がとどかない。驚馬はどんなに鞭打たれても駿馬にはなれない、ここに云いようのない悲歎がある。

さうした世にあたって、私共に同座して下さって、共に

ナムアミダブツ

信心とは

和上おおせに

〃聞くとは

称うる念仏の

イワレを

聞くのなり――〃

聖人ご和讃に

〃弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは〃

信心とは

称える六字の

オマコトを

ナムアミダブツと

聞くのなり

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

花田正夫

手をとって下さる聖人の御心にふれた唯円大徳はどんなに驚喜したことであろうか。

私はこの聖人の徳風を仰いで、聖人は今一人の私になって下さる人であると度々渴仰してきた。これは盲で聾で啞のヘレンケラーが、献身的家庭教師サリバン女史をたたえて「三重苦の私には外からの教師は無用である。なくってはならないのは今一人の私である」と常に話していたことから、智目も行足もない私になくってはならぬ人、今一人の私になって下さる方が聖人であると痛感したからであった。

歎異抄の第九章ばかりでなく、到るところに聖人のそのお心にふれる。第三章にも「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるをわれれたまいて云々」と、煩惱具足のお前達とは仰言らず、われらは、の一句に、同座の聖人にふれる。第二章には「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみか

ぞかし」と御自身を打ち出して下さっている。心して読めばいたるところにその信徳がにじみ出ている。

菩薩は同事の行、病人には病人の身になりきって下さる行を身につけていられると聞く。たとえば觀世音菩薩は、世間のあらゆる声を聞きとって、それに応じて千本の救いの手をさしのべて下さるのである。

又、仏陀は、十界（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏）をすべて身に具していられる。これはあらゆる世界をのこらず胸におさめて下さるのである。油が水に浮いたように、我ひとり尊しとなるのではない、一切の世界と同じで下さって、やがてそこに救いの光をとどけて下さる方である。

さて、今一人の私とあらわれて下さる聖人は、飽くまでも愚禿の身、臨終の一念にいたるまで、欲も多くいかり腹立ち、そねみねたむ心の常にひまなくおこって、きえずたえず、とどまらぬ凡愚こそわれなり、と自照せられているので、菩薩や、諸仏に導かれる外にたすかりようのない身であると慚愧していられるのである。又、小慈小悲もなき身にて有情利益はおもうまじ、如来の願船いまさずば、苦海をいがかわたるべき、と、愚禿悲歎述懐和讃で御晩年

れだけではすまされない。自分は決してこんなこととはしないと、別人のようにすましては居られない。その藤原さんと自分と共通点がある。あきさんも煩惱具足の凡夫である、また、よいのわるいのと云っているが仏様の御目にはすべての者を一子とみそなわして下さるのだから、仏の子として互に兄弟である。そして、自分にもこの人と同じ業縁にありと同じことをやらす、否、もっとひどいことをするかも知れぬ身である。さらに、この人も仏縁に恵まれれば、丁度、五逆の阿闍世が、仏の導きで信の人となり、今では我々のよい先達と仰ぐ人に転じたように、仏心が徹到して念仏者となれば、我々の大先達となりうる人である」と言われた。

私はこれをお聞きしながら、池山先生も、人間の織りなす一切の罪業の中に御自身を見出し、そこに無碍の慈光の輝くことを感佩していられるのに驚いた。同時に、是非善悪の冷たい風にさらされた藤原あきさんが、池山先生のこの心にふれたらなあ」と想像した。

それよりも、この一事から、聖人も亦、一切の人類の織りなす罪業の中に御自身を見出される。そこに我々としては自然に、同座、同心して下さる聖人の徳光に浴するのである。

更に今一步聖人の御心について知らされることは、一切

にのべられている。

さて、こうした聖人が、どうして同座して下さったのであろうか。それについて、歎異抄第十三章の一句、

「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべし云々」との聖人の仰せに着眼せられる。内に八万四千の煩惱のこらず身にもつ我々は、それ相応の縁にふれると、腹も立つであらう、また愚痴も出るであらう、そしてどんな業さらしをするかも予測出来ないあさましい身である、との仰せである。

こう仰言る聖人は、煩惱具足の我々が縁次第で織りなす一切の罪業を見られて、そこに、自分も同じ縁にふれると同じ罪を犯す人間だよと、御自身の姿を見出していられるのである。これについて、京都時代に池山先生が話して下さった一事を思い出される。

それは、藤原あきさんが、主人と子供を捨てて藤原義江のもとに走った当時である。新聞や雑誌はこぞってこれを非難し、人非人、人間の風下にもおけぬ人とやかましくさわがれた。又、四国の医師で得度までしていた某氏が、これを批評して、ひどく酷評したことがあった。私が先生のお宅を訪ねると、その本を示されて「藤原あきさんのやったことは成程ひどいことではあるが、念仏の上からは、そ

の罪業の中に御自身を見出して下さるには、聖人御自身がどんな罪業にも障えられぬ、尽十方無碍の光明を御自身にうけていられる、それがなければ同座しようとして、あまりの暗さにたえられぬものがある。例えば、不治ときまった患者に対して医師なり看護婦は非常に苦しむのである。それもつきつめて考えると自分自身が死を前にして堪えられぬから逃げ出したくなるのである。もし死によって消えぬ光を知らされて居れば、不治の病は不治として、今日一日になすべきことを落着いてすることが出来るのである。そのように尽十方無碍の仏光に照護されていられる聖人は一切の罪業の中に御自身を見出され、それがあって同事の行が、仏力自然の力で、求めず願わずしてあらわれるのである。

最後に、西遊記の孫悟空が、仏掌の外に出たいと思つて空中を飛行したが、ここならと思つておりて見ると、仏の御指の一節しか飛んでいなかったと知り、廣大無辺の仏掌裡からはどうしても出られぬとさとしたとある。文学者の丹羽文雄さんは、三重県の真宗高田派の末寺に生れたが、大学を出ると文学に専念して、寺を出た。そして仏教も聖人も捨てて、人間中心の文学にはげんで行った。そうした時、亀井勝一郎氏から「君は親鸞も仏教も捨てたといつて

いるが、君の書いているものを読むと、聖人の廻りをドウドウめぐりしているではないか」と指摘され、それで、孫悟空こそ自分であったと気づき、聖人について筆をおこし、矢張聖人の慈懐にかえったと、告白している。

ここには聖人の徳光を知らされ、私の全煩惱のすみずみまで聖人が、自分も同じだよと、現われて下さり、無碍の仏光を、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと手をひいて下さることを渴仰し、「おちこぼれない」撰取不捨のたのもしさを味わせていただけるのである。

然し聖人は決して仏、菩薩ではなく、低下の凡愚にしっかりと足を地につけて下さっている。その聖人の上に大きな慈光を感佩出来るのは、丁度、秋空に明月を仰ぐ時、その美しさに心うたれるけれど、月は光も熱もない、黒い固りにすぎないが、その月が太陽の光をうけて、それがそのまま地上に照り返して、月光となっているように、聖人にして聖人ならぬ仏徳が、聖人を縁として私自身に照り返して下さるのである。そのまんま、聖人は如来の御使として仰がずには居られないのである。

私はここに浅原才市さんのうたを思う

わたしのところか
あなたのところか
わたしのところか
わたしがあなたに
なるのじゃないか
あなたがわたしに
なるところ

聖人が同座して下さるおかげで、知らず識らずに、一味の信海に導かれて行くのである。御恩うれしや、南無阿弥陀仏と申さずにはいられないのである。

(五四・春の彼岸稿す)



撮 取 不 捨

石 田 十 九 三

ここから再び昭和十年の事を書きます。この年の春亡くなった馬のかわりに求めた馬が、馬小屋でバタバタするの獣医さんに診てもらいますと、藁(わら)で腹を摩擦すると治ることがあるから力をいれて擦ってやりなさい、馬の腹痛ですとのことでした。それから家内と代る代る朝まで擦りましたが苦しいのがおさまらず、日の出頃に小さな声でヒヒンと鳴いて死にました。私達二人は合掌して、次の生は人間に生れて来なさい、そして念仏を聞くんだよと云ってお念仏を申しました。この年は仕事を休みましたが、それからもう馬を引く事を止めることにしました。

一月に石炭を運んでいた京都織物会社に汽缶助手として雇われました。はじめは汽缶士が焚くだけの石炭をトロッコで運ぶのが仕事でした。すこしするとポイラーに送水するオシントンポンプのバックキングの破損をなおすことを教えてもらったりしました。ポイラーは四個もあり寒い時一個が休み、夏は二個が休みになっておりました。汽缶は年

に一度検査がありました、掃除屋が汽缶の中の湯垢を取り灰出しをした後は、府庁から検査員が来て検査、あとは汽缶士の仕事で、安全弁の取付、マンホールのバックキングの作り方、取付方、送気管の接手のバックキングの作り方、取付をすますと、火入式が行われました。直経八尺、長さ三十尺の英国製ランカッシャポイラーでした。

火入式の後には藁を一日焚き、次は割木で一日焚き、三日目には石炭を少しずつ焚きして、制限圧力まで蒸気があがると、ずつと焚き続けるのです。

段々と仕事を教えてくれましたし、私も三十になって居りましたので、一日も早く汽缶士の免許がもらいたかったので、この年の十一月、京都市立商工専修学校の汽缶科に入学しました。日曜は休日でしたので昼は法話会の講演を聴聞し、晩には下鴨の説教所の同信会に参りました。

翌年三月汽缶科の試験に合格して四月一日に免許証をいただきました。早速会社に汽缶士として働かして下さいと

申込みましたが、欠員が出来るまで助手として働くようにとのことでした。

七月に会社の事務所に呼び出され「府立医科大学の発電所に汽缶士の欠員が出来たから、周旋をたのむと云ってきているが、君だったら永い間石炭の運搬をしてこの会社に出入して人柄も判っているからお世話させてもらってもよい」とのことでした。この会社で汽缶士になりたいけれど欠員がいつ出来るかわかりませんから、御世話を願います申しますと、早速電話で連絡して下さいました。

七月十一日に履歴書と誓約書に、市内在住の保証人の印をもらって病院に行くと、早速と試し焚きをさせられ、すぐ採用ときました。病院のボイラーは八三のランカッシュヤ四個あり、夏期は二個しか使っていません。それに當時としては新式の投炭機がついており、汽缶士がスコップで投炭の手間がいらずらくな仕事とっておりました。十月末からは突然と多忙になってきました。それは病室に温管を通る蒸気が必要になったからです。ボイラーは三個になり、蒸気が思うように昇らず、二人で苦労しました。春になると仕事がらくになってきましたが、官庁は石炭を入札で買いますから、良い石炭は来ません。その上北支事変が拡大して支那事変となり、良炭は軍需品となって、昭和十三年頃から泥炭、褐炭の類でした。冬期になると困難

したものです。投炭機だけでは蒸気が昇らず、手焚きし、デレキという機具でボイラーの中を掻きまわし火力を強める外に致しかたがなく、肩から指先まで神経痛になって困りました。

当時、重病がやっと恢復にむかわれた時、池山先生は「病中にあれこれと気づかしてもらったことを、あの事も、この事も同信の方にお話ししようと思っていたが、全快して見ると、お話ししたかった事の半分も忘れてしまった」と笑いながら御講話で述べられました。その後、池山先生の御講話を聴聞したのは、私が先生からお聞き出来た最終でありました。家に帰り妻にもお話の大略を聞かせて、有難くお念仏を二人で称えさせていただきました。先生の御恩徳の深いことをあたらしく感謝いたしました。

先生は昭和十三年春から又々病床につかれました。前の先生の御重病の時、川畑愛義先生が先生のお病気が心配で金閣寺の近くに引越されて、先生の御病気を診療につとめられたことを聞き、私自身は広大な御恩をこうむりながら謝すことも出来なかったことを慚愧せずには居られません。十一月九日、多くの名医の見まもる中で、静かに念仏の息が絶えられました。その数日前、奥さんに

何も残るものはない
何も残るものはない

ただ念仏だけが残ってくれる
ただ念仏だけが残ってくれる

えらいこったよ、有難いこったよ

とささやかれ、これがまとまったお言葉の最後であったとお聞きし、先生は本当に只人でなかったことを深く感知させられました。

十一月十二日、秋空重く風寒き日、東本願寺前の重信会館で先生の告別式が行われる直前に、先生をお慕いする人達は、遠くは福井、愛知、四国、岡山から馳せ参じられました。弔電も各地から相次いでとどき、先生を追慕されるこまやかな情懷がしるされてありました。

一時半、葬儀委員長舟橋省吾京大教授の告知で式が始まりました。先生の無二の信友であられた近角常観師が選ばれ、光演法主の筆による、無碍院待山釈一道栄信士の法名が中央に安置され、又東本願寺から供えられた香木が紫煙をたなびかせ、燭灯ほのかにゆらぎ、献華の紅白、みなこの日にふさわしき莊嚴なものであった。

式が進行するにつれ、先生の門下生、一つの会、京都学生親鸞会、同信会、大谷大学生有志の代表の弔詞あり、亡き先生をお慕いする声切々。中にも近角師の「君と私とを結びつけたものは歎異抄一卷である」とのお言葉は感銘深いものがあつた。ついで弔電の披露があり、読経が終つて

谷大学長の焼香、次いで御遺族、各代表の焼香が続き香韻ゆるやかに流れて、愛惜の情みつる中に、四時終了。折しも秋陽夕に迫り、紫雲西に走る、感無量でありました。先生が亡くなられて今年も早くも四十年になります。先生の慈願愛語はいつまでも耳の底にとどまっております。私ごとき凡愚な者を微塵のおへだてもなくお導きいただいた御恩、いよいよ渴仰せずには居られません。

× × × × ×
最後の病床にて (続く)

竹内 キヌエ
(四六才)

人の世は

上みれば上で 下みれば下で 限りなし
われ 半身不随なれど いまだ右手あり
耳あり 右足あり

われ 脳腫瘍なれど

まだ味あり 色彩あり 音あり 声あり
言葉あり 匂いあり

それもやがて 消えゆく身なれど

—— お念仏あり、み仏あり 大悲あり 浄土あり
—— われなお 仕合せなりき (四〇年一月歿)

あとがき

あなたらと青葉若葉の日のひかり

例年ながら芭蕉の句がうかぶ新緑の五月となりました。また家々に五月轍りのはためくのもほほえましい日本の姿であります。

自然界のこの美しさに反して、少年の自殺、家出。大商社の不正事件、金融機関の人質による強奪、放火等々の暗いニュースが次から次へと流されますにつけ、我等の罪業の深さを写し出され、弥陀経和讃の五濁惡時惡世界 濁惡邪見の衆生には弥陀の名号与えてぞ恒沙の諸仏勧めたるをいただき、そこにかかる浅間しき煩惱罪濁のわれらに、無数の諸仏が総がかりで弥陀の名号をお勧め下さる。お姿を仰いで念仏に帰えらせて頂くこの頃であります。

○ 「罪と恵み」の近角先生の仰せは、助かるべからざる春をもれなく必ずたすけとげて下さる仏願を讃仰して下さいました。

「二世の利益」は白井先生が、未来の往生にばかり目を向けて現在の救いが留守になつたり、現在の救いに浮かれて未来の成仏

を軽視しないように二世にわたる利益を述べていられます。次号に続きます。

一道会で川畑兄は、医学の進歩と長寿者の増加をあげ、それなのに病人は減らず、医療費は倍増する現状に省みて一人一人が真実の宗教によって安樂生を得るようにと勧められました。

西元兄の日誌抄は、念仏日誌になっていると大きくうなづかされました。店じまいのこともお互に話題にのぼる年になりました。

木村さんは、入院不自由な身で、ことに白内障もすすみ太く大きな文字で原稿を整理して送って下さったものであります。相済まぬことであります。

石田さんは、日支事変の頃の難渋な生活の中に、池山先生とのお別れを克明に誌して下さいました。四十年前ですが、私は肺疾で高熱のためお葬儀にお参り出来なかつたことを想起いたしました。

「同座の聖人」とは池山先生が言われた聖人への讃辞でありました、そこに導かれて一文を草しました。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館。

南区駄上町二の八六、鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新端橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小椋町二丁目四月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八
發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七